

3 バルトのテキスト理論

中 田 晶 子

バルトの『ヴァルドマールのテキスト分析』は、彼のテキスト理論の実践である。この理論によってバルトは、いわゆる狭義の構造主義からそれ以後への転換をはかったのであるが、それは彼自身にとっては、自ら構造分析からテキスト分析へ移行するということであった。

その移行が彼の内部におこったのは、1960年代後半と言われているが、具体的な論文に即して見ると、1966年の『物語の構造分析序説』⁽¹⁾においては「文学の科学」を唱え、言語学をモデルにして、演繹的に物語の静的な構造を取り出すことを提唱している。この段階では、作品に永久不変の構造を見出すことを分析の目的としていたわけである。その後の1968年の『作者の死』⁽²⁾と1971年の『作品からテキストへ』⁽³⁾の二論文によって、バルトは読者論的テキスト論をうちたてた。従来の作品と作者という概念——記号内容によって閉じられた、自己充足的な作品と、作品を支配している、人格を備えた作者という概念——にかえて、無限の記号表現が生成される場としてのテキストと、そのテキストを生み出す主体としての読者を誕生させたのである。

バルトは、幾多の解釈的批評が行って来たように作品に唯一の規範的な意味を求めているのではない。彼が問題にするのは、作家の生産物としての作品ではなく、生産行為としてのテキストであり、意味が生まれ出る場としてのテキストなのである。テキストは、「いくつもの可能な意味が交錯する多義的な空間」⁽⁴⁾となり、そこでは意味は複数化され、唯一の規範という観念から解放されている。言葉をかえて言うなら、バルトは作品の中に固定的な不変の構造を見出すことを目的にするのではなく、作品の構造を取り出す過程を問題にしているのである。

バルトのテキスト分析がそれ以前の構造分析と明確に異なるのは、この点においてである。つまり、単一の固定的なものとしてではなく、生成する過程(=

テキスト)として構造を問題にすること、また、そのテキストを生み出す主体が読者であること、この互いに関連した二つの要素が、バルトのテキスト分析を特徴づけている。

先に述べたように、テキスト分析の対象となるテキストは、作品とは異なり、決してそれだけで完結した、閉じられた空間ではない。構造分析では、作品は自己充足的な世界として取り扱われ、作品内部の要素間の関係にのみ眼が向けられていた。テキストは、そもそも、作品と読者の関係の上に成り立つものとして捕えられる。さらに、あらゆるテキストが、他の様々なテキスト——「先行する文化のテキストや周囲の文化のテキスト」⁽⁵⁾——と相互に関連しているのである。この相互関連性——バルトの言う関テキスト性——が、すべてのテキストの存在条件ですらある。しかしながら、テキストがたえず新たに生成しているものであり、関連するテキストの再生産を行うものではないことに注意すべきであろう。「あらゆるテキストは過去の引用の新たな織物」⁽⁶⁾なのである。(傍点筆者)

また、テキスト分析において新しい認識の主体となった読者には、作品を無限に自由に読むこと——つまり無限に自由にテキストを生み出すこと——が許されているわけであるが、それは、印象主義的な主観性の無限の自由が与えられているということではなく、あくまでも、言語活動が読者に及ぼす作用の無限性のゆえに、自由が与えられているということなのである。読者は、「言語の中には入り込み、言語によってどのように働きかけられ、解体されるかを知る」⁽⁷⁾のである。言語の読者に対する働きかけは、初期の構造分析が行ったように明快な言語学的記述に還元することはできないが、一見、読者の主観性だけに頼っているように思われるバルトのテキスト分析も、まさしく言語の究極的な機能に基いて行われることを忘れてはならない。

論文『作品からテキストへ』の中で、バルトは、テキストを字義どおりの意味で「常にパラドクサル [ドクサ (通念) を越えるもの] である」⁽⁸⁾と表現しているが、テキストが常に新たな生成の過程であり、たえまない生産行為である以上、たえずパラドクサルでなければならない。ひとたびテキストとして固定し、ドクサとなったものは、既にテキストではあり得ないのである。こうして

テキストは常にドクサとなる危険をはらんでいるわけであるが、それはパロールが次第に制度化してラングの体系内に組み込まれて行く現象と同じものである。

バルトの仕事は、このように、一つの方法によって捕えきれなかったもの、零れ落ちたものを拾い上げようとする試みの連続であると言えよう。ひとたびテキストとして捕えることに成功しても、その段階にとどまれば、テキストはドクサとなってしまうのであるから、さらに捕えきれないものを求めて前進して行かなければならないのである。「たえず転位するロラン・バルトの神話」⁽⁹⁾は、永久にパラドクサルであろうとして、たえず自らの生み出した理論——それは発表した時点から一つのドクサとなり始める——を超えてゆくバルトの姿を示しているのである。そしてこれこそ、構造主義がその始まりから持ち続けている運命なのではないだろうか。

〈註〉

- (1) Roland Barthes, "Introduction à l'analyse structurale des récits," *Communication*, 8. 1966. 邦訳: 花輪光訳「物語の構造分析序説」『物語の構造分析』(東京: みすず書房, 1979).
- (2) Roland Barthes, "La mort de l'auteur," *Manteria*, V. 1968. 邦訳: 花輪光訳「作者の死」『物語の構造分析』。
- (3) Roland Barthes, "De l'oeuvre au texte," *Revue d'esthétique*, 3. 1971. 邦訳: 花輪光訳「作品からテキストへ」『物語の構造分析』。
- (4) ロラン・バルト, 花輪光訳「テキストその理論」現代思想 1981年7月号, p. 82. この論文は, *Encyclopaedia Universalis* vol. 15. (1973) の "Texte (Theorie du)" の項 1013-1017 の全訳である。
- (5) バルト, p. 84.
- (6) バルト, p. 84.
- (7) バルト, p. 83.
- (8) ロラン・バルト「作品からテキストへ」 p. 95.
- (9) 花輪光「文学の復権」ロラン・バルト, 花輪光訳『文学の記号学』(東京: みすず書房, 1981) p. 61.